

## \*\*\* 今日の健康 (3月) \*\*\*

### < 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) >

今年1月に、国内で初めて確認されたダニが媒介する新たな感染症で、8年前にも長崎県の男性が死亡していたことが国立感染症研究所の検査で新たに分かりました。厚生労働省によりますと、新たに感染が確認されたのは長崎県の当時60歳代の男性で、8年前の平成17年秋、発熱などの症状が出て入院し、その後、死亡しました。この感染症は先月、国内で初めて感染が確認された新たなもので、これまでに山口、愛媛、宮崎、広島 of 4つの県で4人の死亡が確認されており、H25年2月26日時点でこの感染症による死者は5人になりました。5人はいずれも感染が疑われる期間の渡航歴はなく、厚生労働省は国内でダニにかまれて感染したとみています。



#### < 古くから日本にあった可能性があります >

一番初めの8年前に死亡した男性の血液からSFTSのウイルスが検出されたことから、男性に感染が疑われる期間の渡航歴がないのであれば、少なくとも平成17年には日本にもSFTSのウイルスが存在していたこととなります。日本で見つかっているウイルスが海外から新たに入ってきたものだとすれば特定の地域で流行してもおかしくないはずですが、これまでの患者さんは時期や場所がばらばらで、流行発生していません。これらから、SFTSのウイルスは古くから日本にあった可能性が高いのではないかと推察されます。

中国では原因不明の病気として、2009年頃からダニにかまれて感染し死亡した症例が報告されています。

#### < 症状、注意事項 >

普通の風邪と見分けがつきにくく、感染すると6日から2週間の潜伏期間を経て、高熱、嘔吐、多量の黒色下痢便、血尿といった症状が現れます。血小板数が著しく低下し、体中の血が固まらなくなり、止血不良、血便、血尿といった出血症状を起し、多臓器不全を併発する恐れがあります。致死率は12%とされています。

有効な治療法は確立しておらず、予防接種などの予防法もありません。

このウイルスは、マダニの仲間により媒介され、日本を含めて、アジア・オセアニア諸国にも、広く分布しています。現在日本に生息するマダニは名称がついているものだけで47種類いますが、今回確認された新型ウイルスを持つと疑われているのはその内の2種、フタトゲチマダニとオウシマダニです。家の中に生息するダニとは種類が異なり、日本でも屋外に広く分布し、多く生息する草むらなどでは長袖、長ズボンを着用し、かまれないよう注意を呼びかけています。

この種のマダニは、もともとは小さく3~4mm程度ですが、血を吸うと大きくなりおよそ4倍の1.5cmになります。血を吸われて1週間、長いと1カ月くらい皮膚に食いついていて、ダニの唾液に、麻酔類似物質が混ざっており、刺されても痛みもかゆみも感じることがないケースがほとんどです。

かまれた場合に一番注意しなければならないのは、無理にダニを取ろうとして、体をつぶすことで血液を体内に逆流させると、これが感染リスクになります。ダニが媒介する病原体に感染したときの典型的な症状としては、全身に紅斑が出る場合が多いので、その場合には急いで医療機関へ駆け込んで下さい。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏